

# 低学年のみんなで作る詩の授業

—「うんとこしょ」(谷川俊太郎)—

東京都豊島区立池袋第一小学校

川畑 秀成

## 一 詩づくり

「うんとこしょ」は、谷川俊太郎の四連の詩である。本文は二行ずつで一連が構成されており、第一連は、

うんとこしょ どっこいしょ  
ぞうが ありんこ もちあげる

となっている。

楽しくほほえましい詩であるが、この詩が、詩たらしめているのは第四連があるからである。第二、三連でも、生きもの以外が「もちあげる」ことで、視点が転化している。けれども第四連の「うたがこころをもちあげる」にいたって、「もちあげる」行為が物理的な力だけではなく、精神的な作用として昇華している。ここに、この詩のすばらしさや魅力がある。低学年の子どもたちにも何とかそのことを、みんなで音読しながら楽しく感じさせたいと考えて授業を構想した。

## 二 授業の流れ(全三時間)

### (1) 一時間目

まず詩の各連で、第一連の「ありんこ」にあたるところを虫食いにして、子どもたちに当てさせる授業をした(注)。

本学級では、第二連の「あめんぼ」と第四連の「こころ」を当てる子どもがいて、みんな驚くともにとでも喜んでいた。そして全文を暗唱する。短い詩でリズムもあるのですぐに覚えることができ、休み時間も、「うんとこしょ」と廊下で声がしていた。

### (2) 二時間目

「○○が□□(を)もちあげる」の部分各自で創作させた。数多く創らせることを目的にした。いろんな力でもちあげるものを出させたかったからである。多い子は、二十五個も創ってきた。家にもってかえってやっていかとお願いくる子までいた。

### (3) 三時間目

あらかじめ創作したものを集めておいて、教師が選んだものを、短冊に書かせてから黒板に貼らせた。

そして、「ぞうがありんこをもちあげる時は、どのくらい力があるかな? うんとこしょ どっこいしょ、を読んでみて?」と質問した。子どもたちは小さな声で、「うんとこしょ……」と音読した。次に、「もう少し強い力でもちあげるにはどう読めばいいかな?」今度は少し大きな声で読んだ。「それじゃ、もっと力強く読むとどうなるかな?」ある子は、動作を交えながら真っ赤な顔で読んでいた。「それじゃあ、みんなが短冊に書いたものは、三つの力のどこになるか、考えて貼り直しに来てください。」と指示した。子どもたちは、考えながら、三つの場所に貼り分けていった。「力の強さ」という視点をもって貼り直させるためだ。この時、教師が事前に予想したものと違ふところに貼って

る子がいた。「カブトムシが○○君をもちあげる」を一番強い力に貼っていた。理由を聞くと、「カブトムシより○○君はとっても重いから、いくらカブトムシでも大変だと思う。」と説明していた。なるほど、その子なりのイメージが根拠となっている。たとえ教師の意図と異なっているとしても、その子の感性をできるだけ大切にしていきたい。この部分は、この説明で他の子どもたちも納得していた。

また、私は「ゾウが恐竜をもちあげる」や「雲が太陽をもちあげる」と「川畑先生が○○先生をもちあげる」が同じところに入ったらどうしようかと思っていた。○○先生は、私よりも若くてかわいらしい女の先生なのだ。でも、ちゃんと(?)一番力の少ないところに貼ってあった。

その次に、「みんなの貼った短冊の中で、目に見えないものはありますか?」と質問した。最初は、「風がもみじをもちあげる」や「空気が紙飛行機をもちあげる」が出されていたが、話し合いで「もみじや紙飛行機は見えるよ。」ということになった。「楽器の音が声をもちあげる」と「きもちがうたをもちあげる」が残った。そして、その二つを第四連にして、詩を構成しようということになった。(写真参照)

第四連の「うんとこしょ……」をどう読ん



だらいいか質問した。「ふつうに」「少し弱く」などに続いて、「やさしく」「思いやりをもって」などが出された。力強さではなく、心をこめて読む必要があることを確認した。二年一組の「うんとこしょ」ができあがった。テープに録音してみんなで聞き合おうと、とても真剣に楽しく聴き入っていた。

### 三 詩を音読することの効果

今回は低学年で、詩を音読しながらまるご

とその作品を感受し、そして、感性を生かしながら創作し、どう読むか工夫することで解釈を深めつつ、楽しく音読していくという繰り返しによって作品を理解していく実践を試みた。

以前にこの方法で高学年にも実践したことがある。六年生、谷川俊太郎の詩「生きる」である。「生きていくということ」「いま生きているということ」と、リズムとテンポをともなつて順次昇華していく谷川の表現方法が内容を支えているこの詩を、子どもたちの感性によって読み解きながら、そのクラス独自の「生きる」という詩を創っていく作業は、とても楽しいものであった。

#### 注

「虫食い」の実践はインターネットTOSランド伴一孝氏の実践を参考に行った。

かわばた ひでなり 十六年間の中学校教員生活を  
経て小学校へ異動して五年目。国語科教育における  
群読指導の可能性を模索中。